埼玉県大里郡花園村の考古学的調査

中川成夫　川村喜一
小高清次　前田碧

一　はしがき

一九五四年六～七月にかけて、本学史学科では、その調査事業の一つとして、神奈川県中郡大磯町エリザベスサンダースホーム内横穴群の発掘調査を行つたが、[1]これにつづいて五五年度も、適当な調査地があれば調査したい旨の依頼が宮本教授よりあつた。中川は東京大学に在職中、一九五三年、その前年に埼玉県派遣学生として、東京大学文学部考古学研究室に内地留学中であつた、現寄居中学校教諭相沢庸典氏の尽力で、寄居町教育委員会の依嘱によつて調査した、同町桜沢・中小前田古墳群の発掘調査に参加したが、その際、嘗て百基をこえたこの古墳群が、土木工事や開墾工事、或いは、監督官庁の連絡不充分から、急速に消滅しつつあるのを見た。これらの大半はすでに盗掘されてはいるが、その地域での正式の発掘報告例は一例もなく、また東国の末期古墳群として研究価値がある点などより、この地域の長期調査を計画している寄居町、及び東京大学の調査に協力し、荒川流域後期古墳文化の闡明の為に、本学も出来るならその事業の一翼を担いたき旨を宮本教授に回答し、改めて相沢氏を通じて寄居町の了解を求め、同時に東京大学側の了解を求めた所、両者の快諾をえた。

一九五五年七月二三日、中川は手塚・宮本教授・林講師・学生鳥崎俊君と共に相沢庸典氏の東道で、第一の候補地である小前田古墳群第57号墳を踏査し、地主内田亀造氏の了解をえて、その年の夏休に発掘調査を行うこととし、[2]文化財保護委員会に対し、所定の手続書類を送付した。

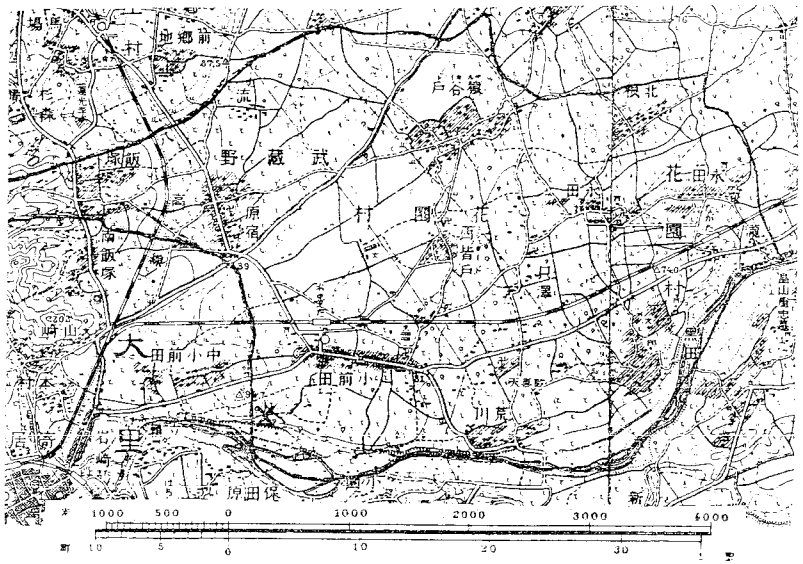
然るに、中川は同年八月、地方史研究所主催の出雲古代文化綜合調査に参加して、八束郡荒島村神山古墳の発掘に従事したため、時間的に余裕が乏しくなり、また同年冬にはセントポール・グリーンハイツ内集落址の調査が行われた為にその機を逸した。五六年春にいたつて、グリーンハイツ内調査資料の整理も緒についたところ、たまたま東京大学考古学研究室の吉田章一郎・甘粕健の両君を通じて、荒川中流域の古墳群では、寄居町分よりも隣村花園村にある古墳群の方が破壊の度が著しいとの連絡があつたので、同年六月一五日、甘粕健君の東道で、中川・川村・小高の三名は花園村小前田に赴き古墳群を踏査し、その実情を確かめ、年内に削平する予定という後述する三基を候補地に選定し、教育長大野茂氏の御尽力で各地主の了解をもえ、また相沢氏の了解をもえた。帰学の上、科長手塚隆義教授に報告すると共に、五六年度史学科調査事業の一つとして行うこととし、同年八月、再び中川・川村は現地に赴き宿舎等の打合せを行い、諸般の手続を完了し、同年八月二五日より九月七日まで、史学科教員・学生延約二〇〇名参加の下に、後述する調査を行つた。

更に、五六年一二月、及び五七年四月に中川は再び同村を訪れ、その後の新資料・追加資料の蒐集を行つた。前述のように、本調査はその動機を作られた東京大学文学部考古学研究室の吉田章一郎・甘粕健・寄居中学校教諭相沢庸典、調査地の交渉等に協力をえた花園村教育長大野茂、宿舎を提供された同村町田愛二・坂田良秀、発掘資材借用に協力をえた糸井武司・花園小・中学校、同村遺跡踏査に協力をえた花園小学校教諭田尻高樹、地主服部安吉・服部元吉・中村和治の諸氏に負う処甚だ多く、今、全調査参加者を代表して我々が本報告をなすにあたり、上記の諸氏に深く謝意を表するものである。殊に発掘調査後にも、種々御教示を賜わつた、甘粕健・田尻高樹の両氏の御厚意がなければ、到底この報告もなしえなかつたであろうことを記し、重ねて謝意を表する次第である。

また、本報告を書くに当り、人骨の鑑別・石質の同定などに御教示頂いた、早稲田大学講師直良信夫博士・本学教授石島渉博士、遺物の実測・製図などに協力された史学研究会々員諸君にも感謝の意を捧げる次第である。

二　村内遺跡の概況

花園村は寄居町の東約三粁にある面積一五・八平方粁、人口約八〇〇〇、田七〇町、畑一〇〇町歩、主として荒川の形成する扇状地上に営まれた純農村である。（第1図）



第1図　花園村地形図　太線内花園村，×小前田古墳群所在地
（5万分之一地形図，熊谷・寄居より）

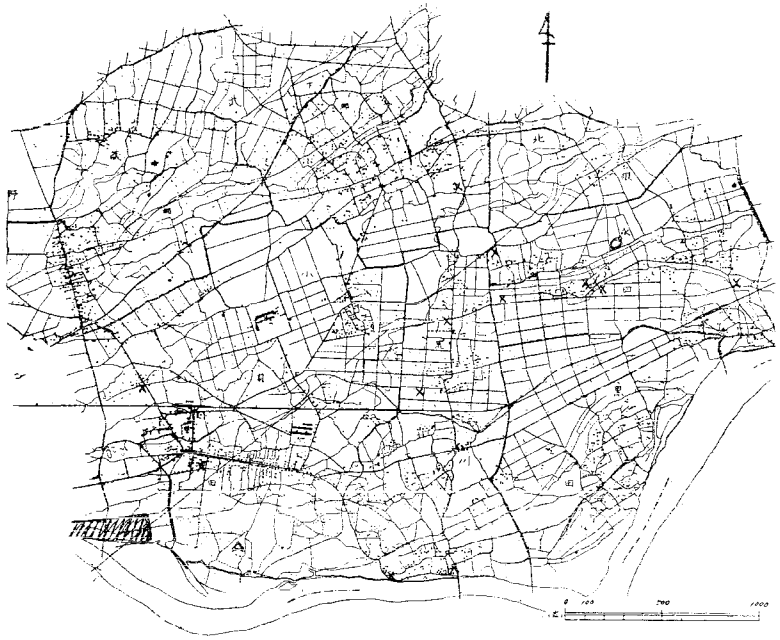
本村は嘗て武蔵国榛沢郡に属していたが、明治二九年の郡制施行により大里郡となつた。村内は上郷・中郷・下郷・小前田・荒川・黒田・永田・北根の八大字よりなつている。和名抄によれば榛沢郡は、新居・榛沢・胆形・藤田・余戸の諸郷よりなつていたが、本村はその藤田郷に属し、中世・近世には苅萱庄、或は鉢形領に属していたようである。(3)

本村の考古学的調査は皆無に近く、僅かに埼玉県史に石器時代遺跡と古墳の存在が記されている程度で近年に至つている。我々が田尻・甘粕両氏の協力を得て踏査した本村遺跡の概要は次の如くである。（第2図）

1　縄文・弥生文化（第1表・第3図）

現在まで知られている遺物出土地は第1表の如くであるが、特に縄文式遺物を多く出土したのは橋尾の小川広太郎氏所有畑地である。この遺跡は地主の多年に亘る蒐集による点もあるが、荒川の岸に近い沖積層にあり、地下約一米の付近より多く遺物が出土し、片岩の敷石が認められたという。或は甲武信地方の河川流域に多い敷石住居址があつたとも考えられる。

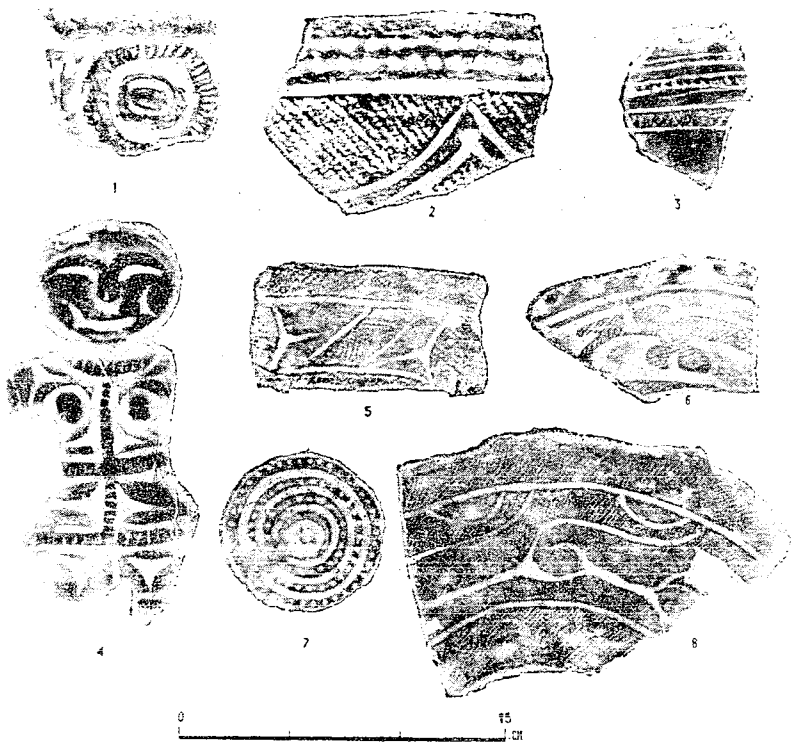
弥生式遺物出土例は僅か一例にすぎないが、隣町寄居



第2図　花園村遺跡分布図（△縄文式遺物，○弥生式遺物，×板碑出土地，斜線部は小前田古墳群）

第1表　縄文・弥生式遺物出土地名表

	地名	遺跡種類	時期	出土遺物	所蔵者
縄文	小前田橋尾	住居址	中	土器（加曽利E・安行Ⅱ・Ⅲ・大洞C）	小川広太郎
				石器（磨製・打製石斧・石皿等多数）	
				土偶・土製耳飾	
	永田、西上	包含地	中	土器（加曽利E）	本学
	荒川、只沢	包含地	中	土器（加曽利E）	田尻高樹
	荒川			石斧	
	黒田			石劍・独鈷石	県史による
	武蔵野			土器・石斧	県史による
弥生	永田			壺	田尻高樹



第3図　村内出土縄文式遺物拓影

1. 永田出土，加曽利E式（本学蔵）2. 橋尾出土，加曽利E式（小川広太郎氏蔵）
3. 同，安行Ⅱ式（同氏蔵）4. 同，晩期土偶，現高 18 cm（同氏蔵）
5. 同，安行ⅢA式（同氏蔵）6. 同，大洞CⅠ式（同氏蔵）
7. 同，晩期耳飾，径 7 cm（同氏蔵） 8. 同，安行ⅢB式（同氏蔵）

町用土からは有角石斧を伴なう竪穴住居址が発見されているので、今後この期遺物の発見が期待される。(4)

2　古墳文化

（第2・3表・第4図）

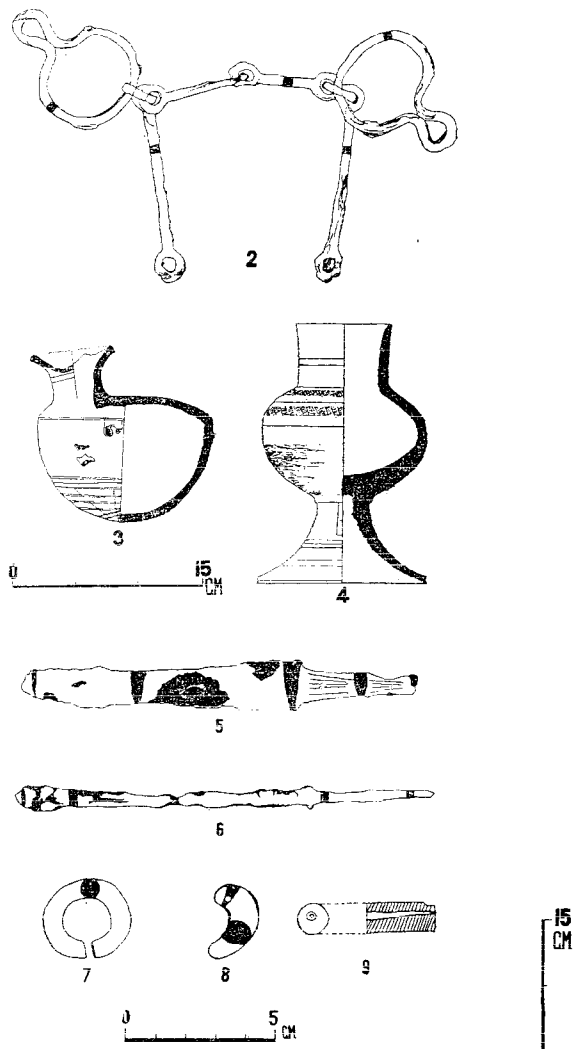
本村古墳群は荒川左岸古墳群に属するもので、特に小前田古墳群は、寄居町中小前田にかけて、嘗て百余基の群集円墳があつたが、現在では殆んど壊滅に近い程減少している。何れも荒川が扇状地を開析して形成した河岸段丘上にあり、編年上後期群集墳に属する様である。同地町出愛二氏所蔵の明治一一年の村誌稿には、日本武尊東征の際の陣屋跡と記され、武器類が出土することをも記している。既

第2表　古墳地名表

地名	種類	内部構造	出土遺物	所蔵者
小前田橋尾塚屋	円墳群集	横穴式石室	埴輪・玉・直刀・鏃・刀子・馬具・耳環	本学 田尻高樹 鈴木武 小川広太郎 中野金助 小柳善一
黒田、上川端	円墳・前方後円墳群集	横穴式石室	直刀・鏃	県史による
荒川	円墳群集			同右
上ノ城		埴輪		同右

第3表　村内古墳出土品分類表

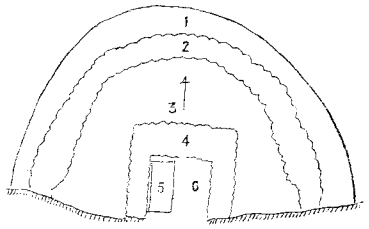
所蔵者	出土古墳	耳環	勾玉	管玉	玉類	鉄鏃	刀子	直刀	馬具	須恵器	土師器	埴輪	備考
鈴木武	第65号	1		3	1				1	1			
田尻高樹	第62号						2						
花園小学校	?					8						1	不明
小柳善一	塚屋	3	8	2	94	2	3			1			数は
中野金助	第77号	4	7		39	●						●	●
本学	第86号					1		1					



第 4 図　村内古墳出土遺物実測図

1. 直刀（本学蔵）2.　馬具（鈴木武氏蔵）
3. 須恵器（同氏蔵）4.　須恵器（小柳善一氏蔵）
5. 刀子（同氏蔵）6.　鉄鏃（花園小学校蔵）
7. 耳環（中野金助氏蔵）8.　硬玉製勾玉（同氏蔵）
9. 碧玉製管玉（鈴木武氏蔵）

往の村内出土品の大要は第3・4表、及び第4図の如くである。何れも後期古墳に多く見られる類である。第5図は五七年四月、同村を訪れた際に、字塚屋の中野金助氏所有畑地が同年一月末に開墾され、円墳一基が約半分削平されたものの見取図である。この古墳は東大測量の第77号墳に当るが、横穴式石室内に更に緑泥片岩を以てした箱式棺一個があり、耳環・玉・鉄鏃類が出土したという。また、墳丘外周に外護列石が認められ、数年前に人物埴輪も出土したという。



第 5 図　小前田第 77 号墳見取図

円墳，現直径約 15 m，現高約 2.7 m，横穴式石室

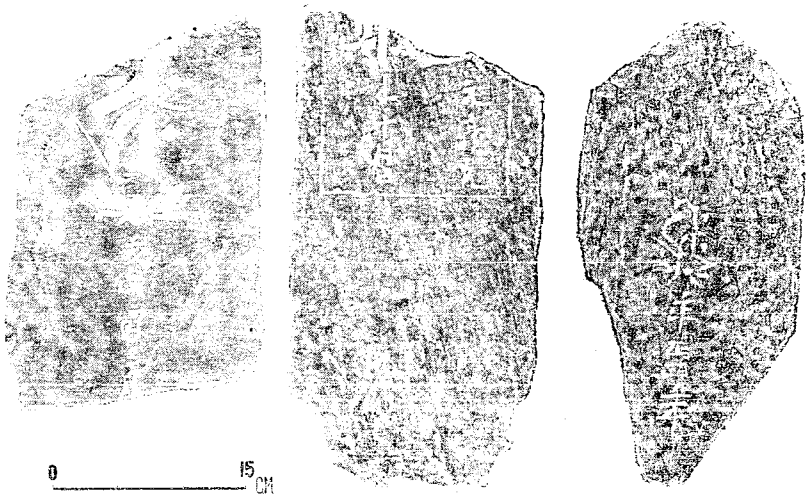
1. 盛土，巾約 1 m 2. 列石，巾約 1 m 3. 盛土，巾約 2 m 4. 石室積石，巾約 1 m，現高約 2 m 5. 緑泥片岩製箱式棺，1.7×0.6 m，高さ 70 cm，金環・勾玉・人骨出土 6. 横穴式石室，巾 1.5 m，高さ 1.8 m，金環・鉄鏃出土

3　板　碑（第4表・第6図）

本村は既述のように和名抄に記す榛沢郡に属していたが、隣町寄居町に見られるような奈良・平安時代に属する遺跡は知られていない。(5)

第4表　出土記年銘板碑表

	所在	種子	記年銘	備考
1	荒川阿弥陀堂跡	阿弥陀	応長元年五月	
2	〃	〃	文保二年三月	
3	〃	阿弥陀三尊	元亨元年十月	
4	〃	〃	正中元年	
5	〃	阿弥陀	暦応二年	
6	〃	〃	〃	
7	〃	阿弥陀	貞和三年	
8	〃	阿弥陀三尊	正平四年八月	
9	〃	阿弥陀三尊	観応？	
10	荒川川端薬師堂		正安四年八月	
11	〃		文保元年七月	
12	〃		元亨元年十一月	
13	〃	〃	〃	
14	〃	元亨元年十月	元亨四年七月	
15	〃	元亨元年	正平二年三月	
16	〃	〃	〃	
17	〃	〃	〃	
18	〃	〃	〃	
19	〃	南無阿□	元亨五年五月八日	



第6図　荒川阿弥陀堂跡出土記年銘板碑拓影

これに反して、武蔵特有の緑泥片岩をもつて作つた板碑の類が比較的多く発見されている。板碑は周知の如く青石塔婆とも呼ばれ、鎌倉時代中期より江戸時代初期に至るまで行われた仏教の塔婆の一種で、主として仏堂・境内・墓地、或は清浄の地に追善供養・逆修作善の意味で造立されたものである。村内板碑の出土個所は一〇ケ所、その数百枚を越えているが、第4表には年号銘のあるもののみを収録した。

A　荒川阿弥陀堂跡（第6図）

金井儀一氏所有畑の中に方二〇米程の小高い草地が残され、嘗てそこに明治初年まで阿弥陀堂があり、三尊仏が祀られていたという。今その仏像は秩父郡内に一体存すると伝えられている。板碑はこの草地内より多数の五輪塔と共に発見され、畦に放置されていた。板碑の種子はすべて、浄土信仰を現わす阿弥陀で、年号は南北朝を中心とした略四〇年に亘つている。

周知の如く、武蔵には平安時代後半より東国武士団が興起し、所謂武蔵七党が形成され、平安時代にはこの地は猪俣党の根拠地であり、その一族の藤田氏・御前田氏・飯塚氏がこの辺を支配した。降つて鎌倉時代にも、吾妻鏡・武蔵七党系図によれば、同じく藤田氏・小前田氏・飯塚氏・桜沢氏が、萱刈庄にあたる荒川左岸の平野地帯、即ち現在の本村、及び寄居町一帯を支配した。(6)

さて、藤田氏の一族で深く浄土宗に帰依し、藤田派なる一派を聞いた人に性真という人がある。性真は民部燕利貞の子で、正応年間に下総猿島郡藤田に高声寺を開き、その弟子持阿良心は、弘安年間に秩父郡白鳥村に善導寺を開き、後に榛沢郡末野（現寄居町）に移り、藤田道場・藤田壇林と称し、藤田氏一族の尊信を集めた。(7)

この阿弥陀堂も恐らく、その頃に建立されたもので、藤田氏の支族である小前田氏一族の仏堂であり、墓処であつたのではあるまいか。東国武士団の末端まで浄土教が侵透した年代なり、経路なりを示すものとして、貴重な資料であろう。尚、本村には同じく持阿の開山と伝える常光寺が大字武蔵野にある。

B　荒川薬師堂

新編武蔵風土記稿巻二四三に、荒川に薬師堂・地蔵堂のあることを記している。その薬師堂に当るものであろう。前者よりやや旧い年号を有するもの、及び造立者の名を記すものとがある。薬師堂は本来真言宗系統の信仰により建立されるが、やはり、この頃に坂東武士間に台密禅を兼ねた修験道、或はこれと密接な関係にある浄土教の一派である時宗が弘通するが、或はそれらに関係あるものであろうか。

最後の妙心禅尼はどの様な人であつたか不明であるが、東京都立川市普済寺にある正中三年銘の双塔の一に「妙心禅尼為逆修也」と刻されている。(8)

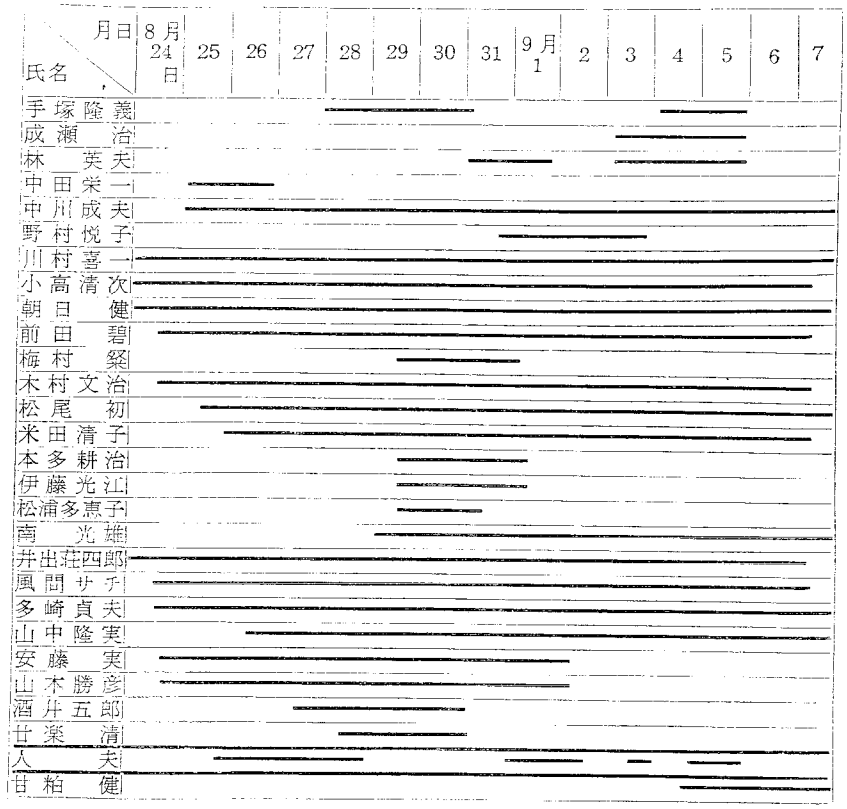
正中二年は西暦一三二六年に当り、元享は本来三年までしかないが、換算すると、三二五年に当る。もし両者の造立者が同一人であるとすれば、興味ある事実である。

近世関係のものは乏しいが、遺構としては大字北根に県指定の旧北根代官所が現存する。旗本日野根家の代官宇野氏の子孫が今も住み、文書なども存し、白洲などの旧態を存している。

以上が我々が甘粕・田尻両氏の協力をえて調査した本村の遺跡概要の略記である。

次に今次調査の主目的たる古墳群調査について述べる。

第5表　調査参加者



三　古墳の発掘調査

1　調査の経過

八月一五日　晴　一三―一八・〇〇

中川・中田・川村・学生八名

第1号墳

テント設営、及び古墳の外形と等高線の測量完成

八月二六日　晴　八・三〇―一七・〇〇

中川・中田・川村・田尻氏・学生九名・人夫五名

第1号墳

午前、古墳の北側の盛土の排除、午後、古墳の南側の排土作業、この時東側の側壁を発見、更に古墳に南北に巾一・五米のAトレンチを入れる。

第2号墳

午後一・三〇より排土作業開始、北側より奥壁と思われる石を発見、南側より天井石二個発見。

八月二七日　曇　八・三〇―一七・三〇

中川・川村・田尻氏・学生一一名・人夫五名

第1号墳

羨道内、及びトレンチの排土作業、これと併行して側壁の露出作業を行った。

第2号墳

側壁と落込んだ天井石を発掘の為、排土作業続行、玄室部の壁面を掘出した。午後、天井石二枚墳外に取出し、引続き羨道部の壁面を掘出し、間仕切りと思われる数個の石を発見、これと併行し玄室部の調査を床面上三〇糎の所迄行う。

八月二八日　雨　八・三〇―一六・三〇

手塚・中川・川村・学生一三名、植木屋

第1号墳

羨道内に落込んだ天井石二枚をチェーンブロックで取除き、更に昨日に引続き、外壁の露出作業を行い、外周を完全に露出させる。

第2号墳

前日に引続き、玄室の床面清掃、及び羨道の壁面露出作業を行う。玄室の床面清掃は九割完成。

第3号墳

午後、川村・学生一名で下検分をした。

八月二九日　雨

手塚・中川、川村・学生一五名、雨の為作業中止。

八月三〇日　雨　八・二〇―一一・三〇

手塚・中川・川村・学生一五名

雨の為、作業が出来ないので、午前中は秩父自然科学博物館見学。午後三・三〇より、小前田古墳群出土品を実測した。（小柳善一氏・鈴木武氏・田尻氏、花園村小学校所蔵のもの）

八月三一日　晴　八―一八・〇〇

中川・林・川村・学生一五名

午前中は昨日の雨の為足場が悪く作業が出来ないので、小川広太郎氏所蔵の小前田古墳群、及び同橋尾縄文式遺跡出土品の実測を行った。

午後は三班に分かれ作業を行った。

第1号墳

雨で左右の側壁が崩壊し土砂が玄室内に落込んだ為、土砂の排除作業を行った。続いて床面上五糎位の所まで排土作業を行う。

第2号墳

玄室部の床面清掃作業完成。平板を据え実測を開始し

外形のみ完了する。

第3号墳

羨道部の排土作業、及び天井石をチェーンブロックで取除く。この作業中、表土より埴輪数十片、及び石斧一個が出土した。

九月一日　曇後夕立　八・三〇―一五・一五

中川・林・川村・野村・学生一四名・植木屋二名

第1号墳

昨日発見した天井石をチェーンブロックにて取出す。引続き床面清掃作業を行つていた時、内側壁崩壊す。降雨の為作業中止。尚、作業中止後残存側壁を保存する為、側壁、及び奥壁に補強板を打つ。

第2号墳

前日に引続き実測、これと併行し床面・内壁清掃、及び両側壁の外側を出す作業を行う。

第3号墳

チェーンブロックにより天井石を取除き、更に玄室内の排土作業を行う。この時深さ一・五米掘下げた奥壁の際で、骨片七片・鉄鏃、及び円筒埴輪片数片を発見した。

九月二日　晴　八・三〇―一七・三〇

中川・川村・野村・学生一三名

第1号墳

昨日崩壊した側壁の上砂の排除作業、玄室内の排土、及び床面清掃作業を行う。この作業中床面の砂利の部分より、直刀二振、及び人骨を発見した。

第2号墳

西側の外壁を掘出す。これは一〇時に終り、これと併行して、石室の平面、ついで横断面、壁面の周囲の実測を行つた。西側の外壁より埴輪片一箇出土した。

第3号墳

玄室内の排土作業、床面上約二〇糎位迄掘下げる。その時円筒埴輪の破片十数片、及び用途不明の鉄片一箇採取。

九月三日　晴　八・四五―一七・〇〇

中川・成瀬・川村・田尻氏・学生一四名・人夫二名

第1号墳

床面清掃作業、この時鳥骨・人骨・臼玉一六箇・耳環一対・切子玉一箇採取、この作業に併行して羨門露出作業を行う。

第2号墳

床面、及び側壁の実測と古墳全体の断面の実測、これと併行し、奥壁調査の為、道路にトレンチを入れる。この結果奥壁の先には遺構がないことが解つた。何れも午前中で終了。午後、奥壁の展開図作製、奥壁の後の積石調査と、床面清掃を行い、三時終了。その後、床面にトレンチを入れ、床面の下の層をみる。床面より須恵器破片・埴輪の破片出土、本日で調査完了。

第3号墳

玄室内の排土作業、この時、獣骨数片・埴輪破片を発見、作業終了後、奥壁・側壁破壊防止の為補強板を設けた。

九月四日　晴　八・四五―一七・三〇

中川・手塚・成瀬・林・川村・甘粕・学生一一名。

第1号墳

床面清掃中、小玉・歯片・鉄鏃を採取、この作業に併行して、古墳の盛土の断面の露出作業を行う。

第3号墳

玄室内の排土作業、床面清掃作業を併行して行い、奥壁、及び側壁の実測をも行う。床面上より鉄鏃三片を採取した。

九月五日　晴　八・四五―一八・〇〇

中川・成瀬・川村・甘粕・学生一一名・人夫二名

第1号墳

床面の清掃と玄室の実測、更に北側にトレンチを入れ、葺石のセクションを取る。床面清掃中、小玉四箇を採取した。

第3号墳

床面清掃作業中、人骨数片・刀子を発見した。午後、玄室の清掃後、写真をとり実測を完成した。床面をはいで地層を調べ、本墳の作業を完了した。

九月六日　晴　八・四五―一七・〇〇

中川・川村・甘粕・学生一一名

第1号墳

残りの実測を行う。

九月七日　晴　八・四五―一一・〇〇

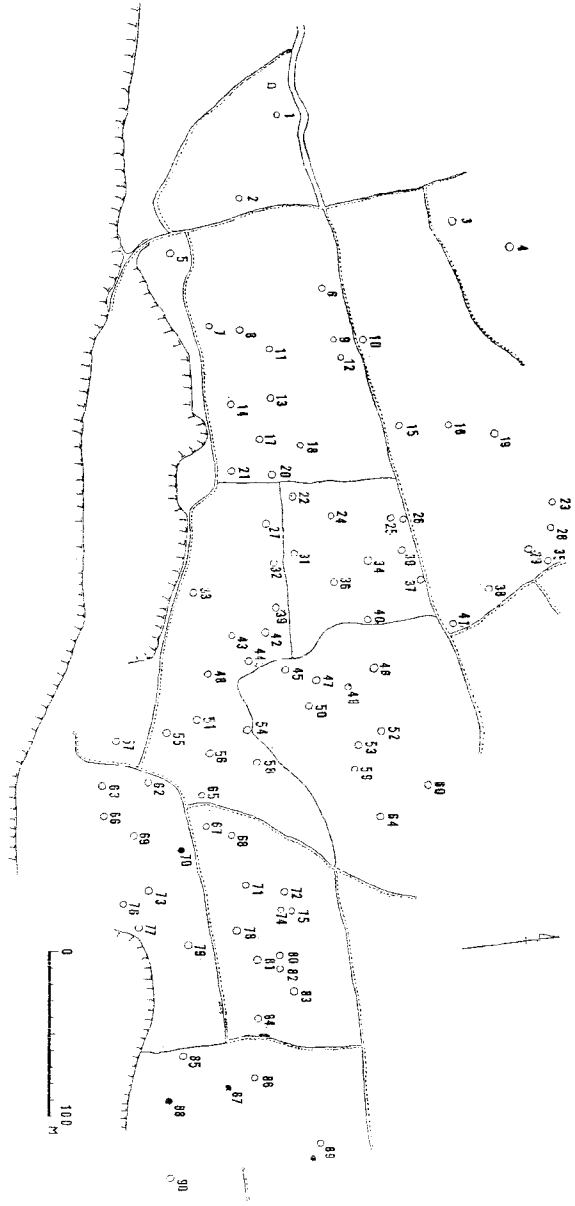
中川・川村・甘粕・学生四名

午前中第1号墳の実測を完成した。出土品、その他の梱包作業を行い、全作業を午前中で終了したが、甘粕氏は尚残留して葺石・盛土などの補足実測を行う。

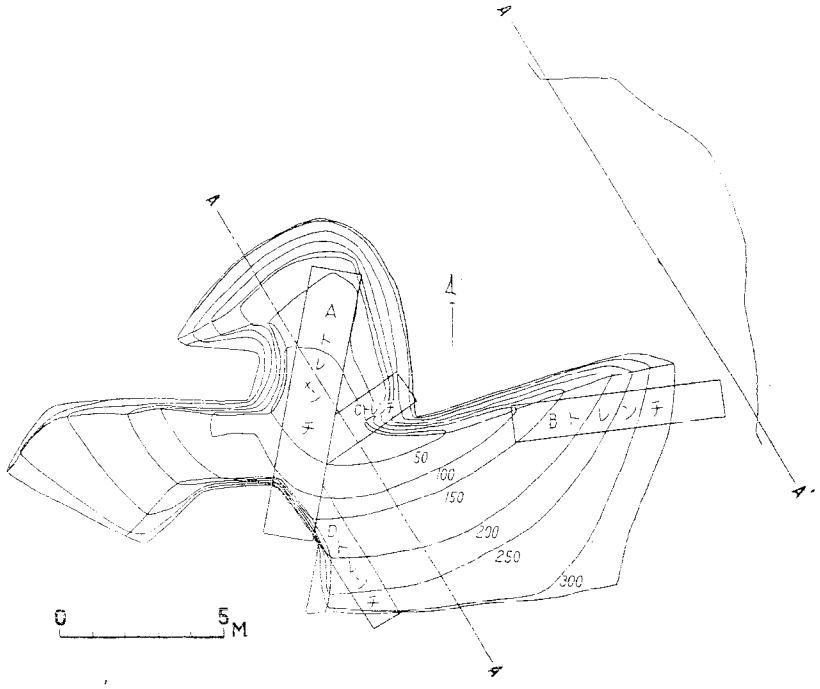
2　遺跡・遺物

外形　A　第1号墳（東大調査第88号墳）

本墳は花園村小前田字橋尾六一二、及び六三三



第7図　小前田古墳群分布図（番号は東大調査の時のもの，●は今回の調査）

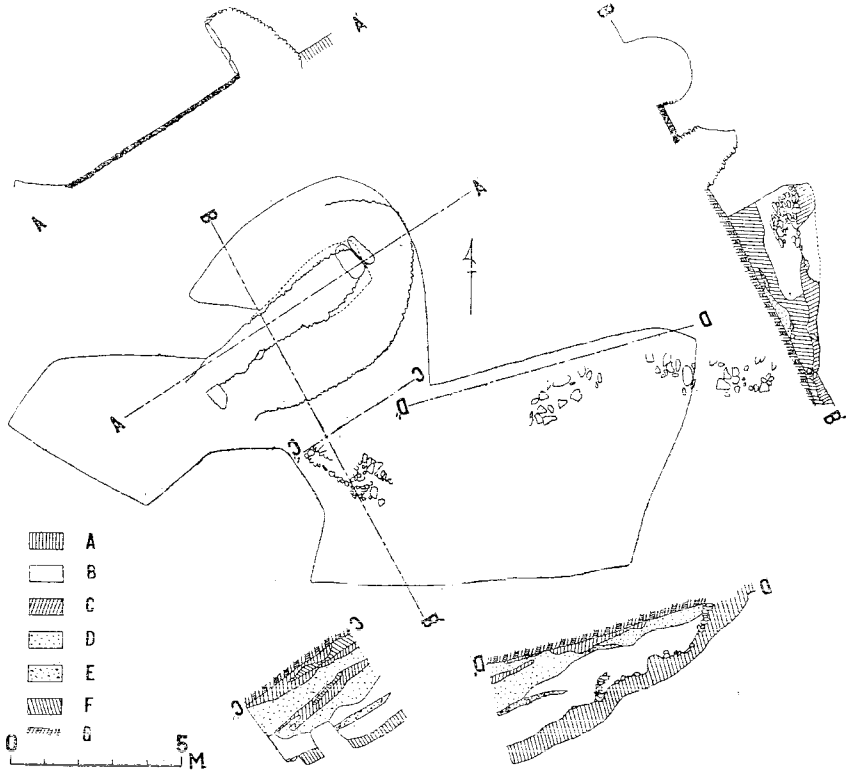


第8図　第1号墳実測図

番地にあり、荒川にのぞむ崖より北約一〇米にあたる（第7図）。

第8図の如く北半分は石室の部分を丸く残して削取られ、又南側も可なり削られ、既に全体の三分の二を失つていた。僅かに東西方向において旧状を知る事が出来たが、現状では高さ三・二米、東西の径二〇・五米であつた。恐らく径二五米程の円墳であつたと思われる。発掘は石室調査の為Aトレンチを、葺石・埴輪の存在を確める為Bトレンチを入れ、更に封土の堆積状態、石室の構築を検べるためにC・Dトレンチを設けた。

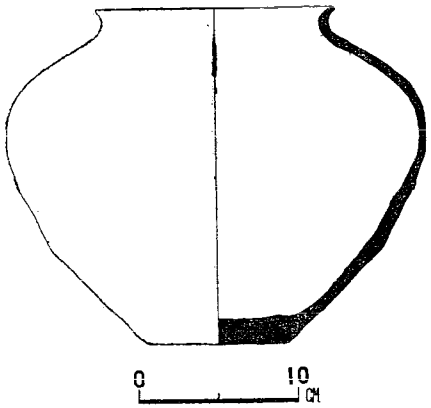
先ず以前に服部元吉氏により、円筒埴輪の大形破片が発見されたので、埴輪の発見につとめたが小破片数片が得られただけであつた。葺石は封土の傾斜面全体にあつた様であり、更にBトレンチ、及び第9図の断面よりみて、単に傾斜にそつておかれただけでなく、段が数段あり、段の部分は他に比べ石が多く積まれていた。石は径二〇糎内外の河原石を用いており、位置は表土より三〇～五〇糎下であ



第 9 図　第1号墳断面図（A, 表土, B, 褐色土層, C, 黒褐色粘土層, D, 褐色砂層, E, 砂礫層, F, 褐色粘土層, G, ローム層）

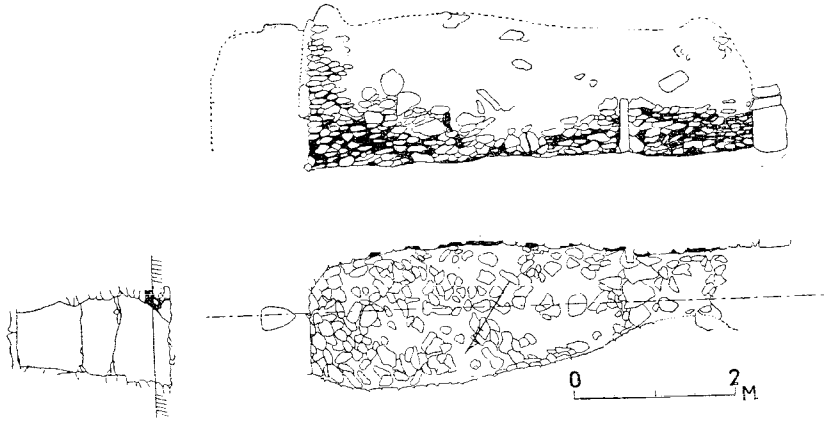
る。封土はローム層上に粘土質の黒褐色土、その上に褐色砂層を、次に砂礫を含んだ褐色土をおいている。葺石はこの褐色土の上におかれていた。尚我々の調査の後で封土中より粗製の土師器壺が発見された（第10図）。口径一五・二糎、底径九・〇糎、最大胴径二六・八糎、高さ二一糎で、中には黄褐色の土と共に焼けた女子成人骨片が入つていた。

石室　石室は長径三〇糎内外の細長い扁平な河原石（砂岩）を積んで構築した横穴式石室で、墳頂のやや南側より西南の方向にあり、入口付近は既に削取られていた。現状では奥壁の部分に二枚の天井石があり、手前の二枚は石室内に落込んでいた。石質は紅簾片岩・緑泥片岩・砂岩である。石室の方位は磁北より五六度東に偏していた。平面はトツクリ形に近く胴張りをしており、最大



第 10 図　第1号墳封土中より発見された土師器骨壺

巾一・七五米、奥壁の巾一・一米であつた。羨門部は不明であるが、比較的良く残つていた東側の側壁の一番手前に、他の部分と異つて巾四〇糎、高さ五七糎の矩形の石があり、その部分に数十個の河原石がつめてあつたと云うから羨門部と考えてよいであろう。従つて石室の長さは約六米である。同じく東壁の奥壁から三・九米の所には、巾一二糎、高さ七〇糎の板状の石が石室内に約一五糎出張つて立てられており、又平面はこの部分でつぼまり巾九〇糎となるので、一応玄室と羨道の境と考えら

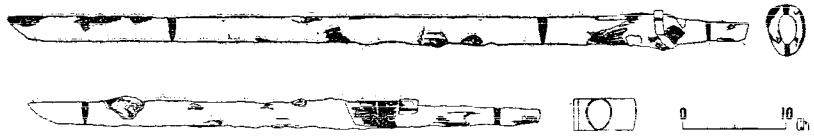


第 11 図　第 1 号墳石室実測図

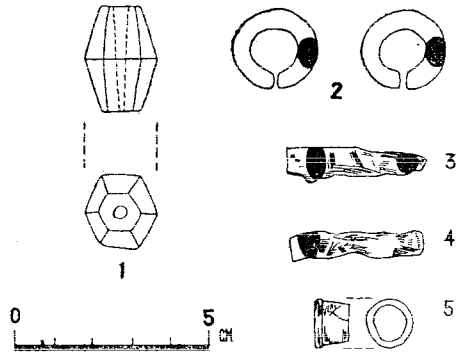
れる。従つて玄室の長さ三・九米、羨道部一・六米、羨門部〇・四米となる。床には長径一五～二〇糎の扁平な河原石が敷いてあり、中に緑泥片岩が混つていた。奥壁は三枚の板石に巾の狭い二個の石がかぶさる様にのせてあり、高さは二米である。側壁は前述の如く河原石を積んでいるが上部はややせり出しており、石室内に可なり落ちていた。又羨道部に近くなるに従い高さを減じている。Cトレンチにより石室の外周を知る事が出来たが、側壁よりやや大形の河原石を石室の周囲に数列積んでおり、基底部の巾一・五～二米、外周では約二二度内側に傾斜して二・三米の高さであつた（第9・11図）。

遺物　石室内には二枚の天井石の他、黒色土が充満しており遺物も散乱していて盗掘のあとを明瞭に示していた。出土遺物は鉄刀二振が奥壁にほぼ接し鋒を東壁に向けて発見された(図版1の2)ほか、耳環・玉類が遺骸の頭部の位置と考えられる、奥壁より五〇～六〇糎、東壁より二〇～三〇糎の範囲に発見され、鉄製刀子の残片・人骨等は散乱していた。

直刀（第12図）はいづれも鉄製で1は全長七二・二糎、刃部の長さ六三糎、刃巾は関に近く三・五糎、鋒に近く二・五糎でやや細くなる。茎は長さ七・五糎で元の部分



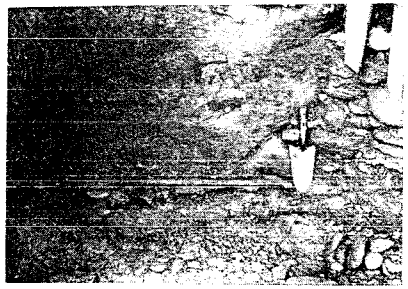
第12図　第1号墳出土直刀実測図



第13図　第1号墳出土切子玉・耳環等実測図

図版1　埼玉県大里郡花園村小前田古墳

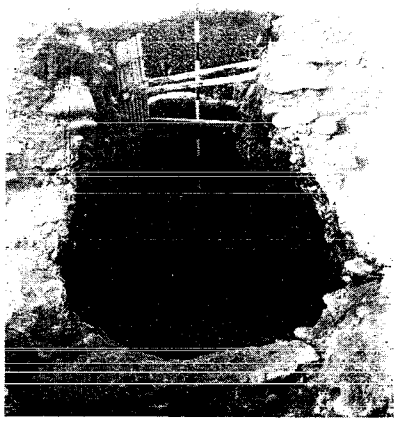
1　第1号墳全景（北より）



2　第1号墳直刀出土状況

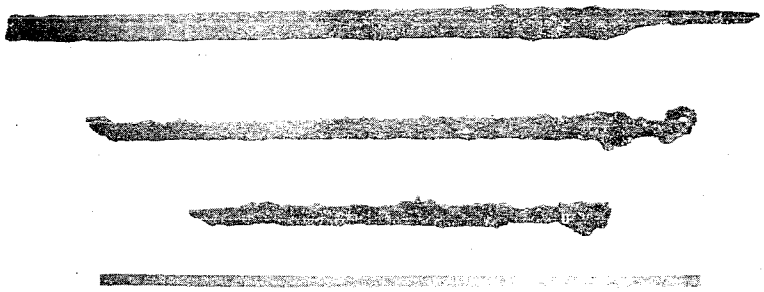
3　第1号墳石室（南西より）

4　第2号墳石室（南より）

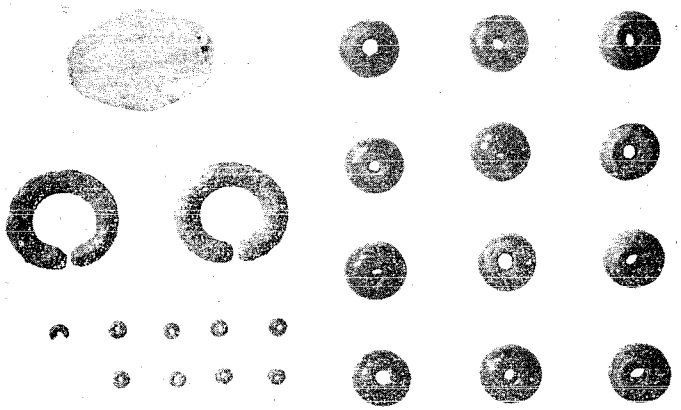


5　第3号墳石室（南より）

図版 2　埼玉県大里郡花園村小前田古墳出土遺物



1　直　刀　　上　付近古墳出土
　　中・下　第1号墳出土



2　第1号墳出土 耳環及び玉類（約3分の2）

を僅かに欠失している。長径五・四糎、短径三・五糎の卵形の鐔が茎に錆着していた。2は全長四九・七糎で小刀に近い。刃部の長さ三七・五糎、刃巾二・七糎、茎の長さ一二・二糎、巾一・八糎で柄の装具が比較的良く残つている。柄頭は方頭式で長さ五・八糎、断面は卵形を呈し鉄製であるが表面に緑青がみられる。鐔はないが縁を有する（図版2の1）。

其他刀子の茎部破片一、鏃と思われる鉄片三がある。

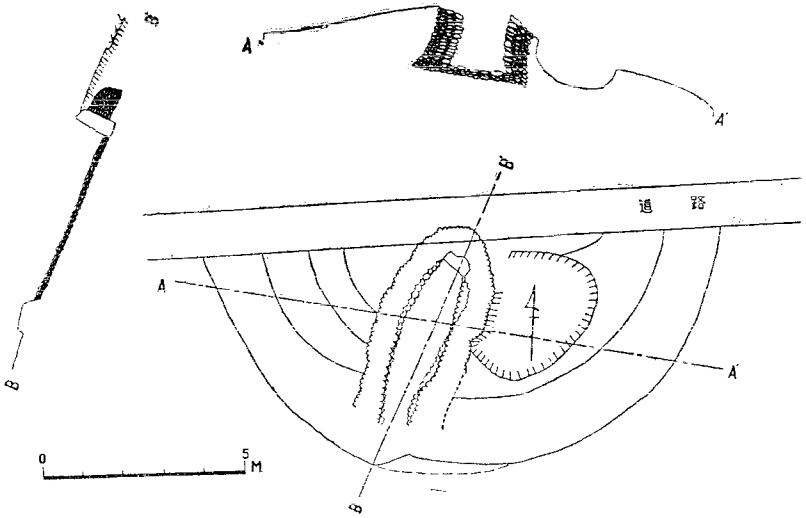
耳環は一対発見され、径二・二糎、青銅製である。他に銅環の残片一と用途不明の鉄製金具一が出土した。

玉類は長さ二・八糎、径一・九糎の水晶製切子玉一、白玉一六（ガラス製一〇、滑石製六）、小玉三四個であり、（図版2の2・第13図）又土師器片数片が発見された。

人骨は門歯三、小臼歯一、其他大腿骨・脛骨の破片で成年男子（三五、六才）一体分である。

B　第2号墳　（東大調査第87号墳）

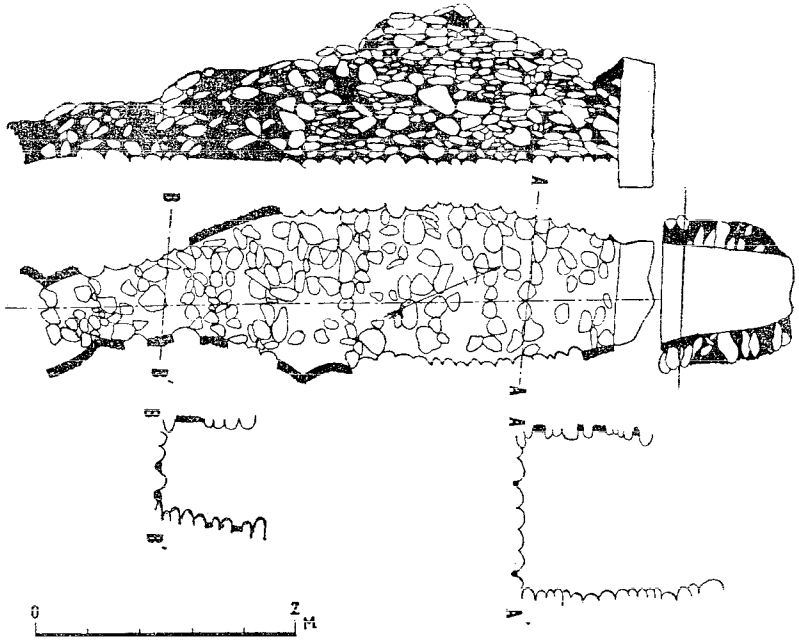
外形　本墳は第1号墳と同地籍で第1号墳の北方約三五米にある。数年前開設された村道工事の為、北半分を破壊され、又周囲も畠に削取られ、石室を中心とした部分を残すのみであるが、もとは径一三米程の円墳であつたと考えられる（第14図）。外部施設に関しては全く不



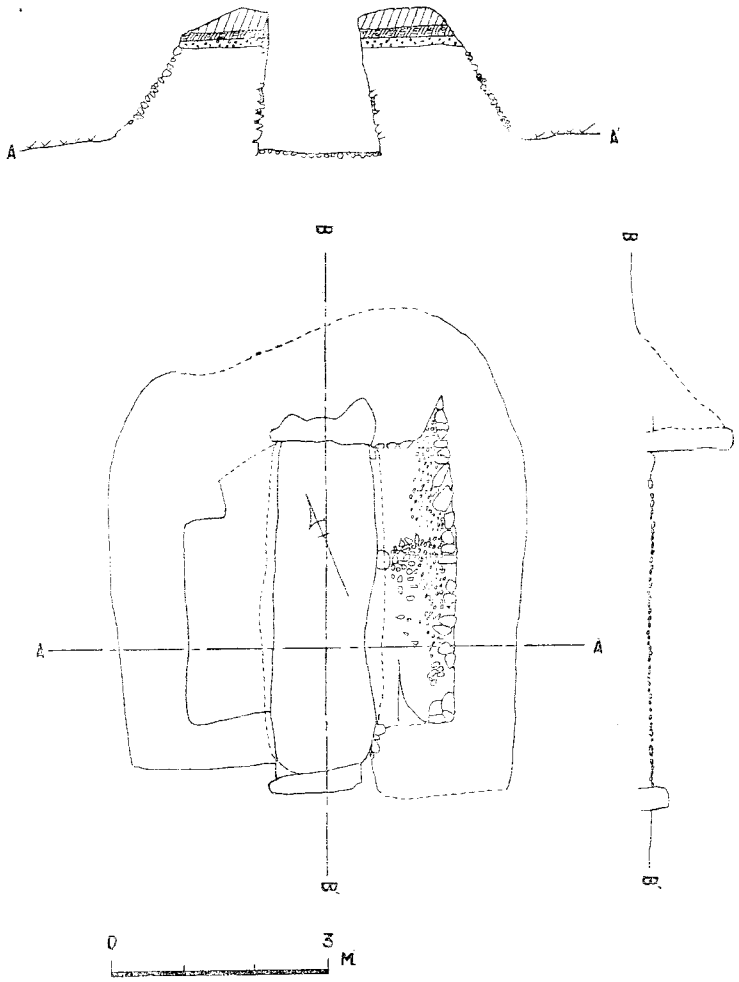
第14図　第2号墳実測図

明である。現状において墳丘の高さは一・八米であつたが、既に天井石の一部や側壁を構成する河原石が部分的に露出していた。

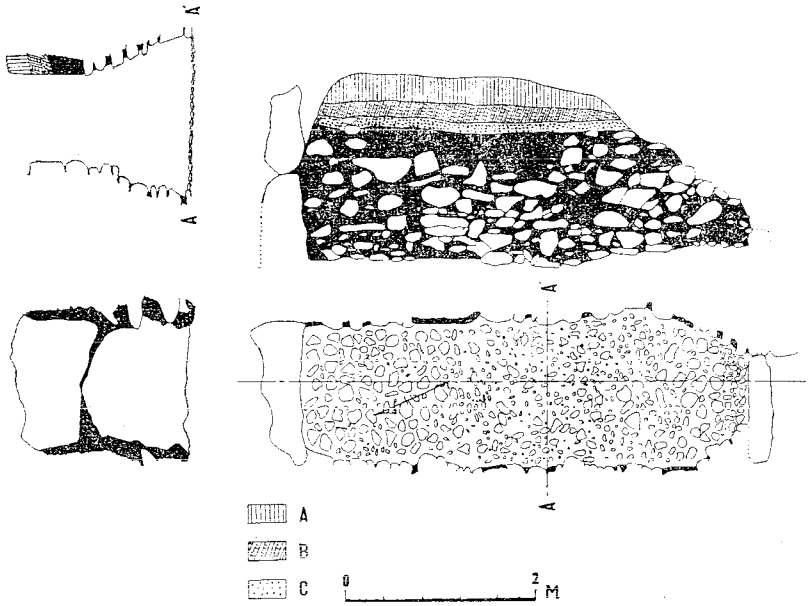
石室　石室は河原石(砂岩)で構築された横穴式石室で半円状の中心より南南西の方向にあり、長さ三・五米、最大巾一・二米の胴張りのあるトツクリ形の平面を持つているが、羨道部は破壊されていて不明である。石室の方位は磁北より二一度東に偏していた。床には一面に径一〇～二〇糎、厚さ三糎程の扁平な河原石が敷きつめられていた。この石は三～四段、即ち一〇糎内外あり、その下に小礫の層が約一〇糎あり地山にいたる。奥壁は高さ一米、最大巾八〇糎、厚さ約三〇糎の一枚石で、床より下に一八糎くい込んでいた。側壁の高さからみて、更にあと一枚あつたと思われる。側壁の比較的良く残つているのは東壁で、大小様々な河原石を積上げ、赤土で目張りを行つていた。高さは最もよく残つている所で一・六米であり、約一〇度の傾斜でせり出しており、上方では奥壁の部分で巾は七五糎である。石室の外側にいく程小さいのを使用しており、外周迄の巾は七五糎で、三～四段積んでいた。石室内には一



第15図　第2号墳石室実測図



第16図　第3号墳実測図



第17図　第3号墳石室実測図
(A，褐色土層，B，粘土，C，小砂利)

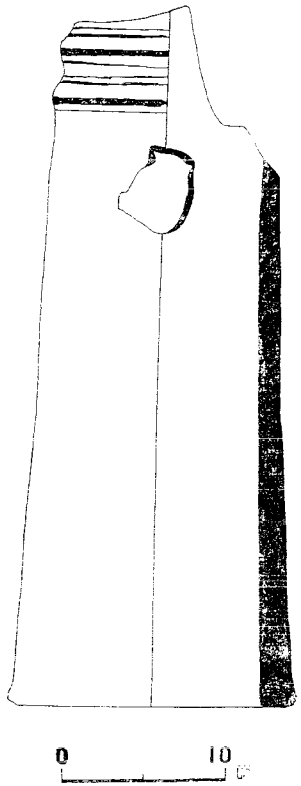
米×四〇糎程の二枚の天井石（緑泥片岩・砂岩）が落ちこんでおり黒褐色土が充満していた（第15図）。

遺物　須恵器の大甕の破片と思われるものが数片石室内より発見された外は全く出土しなかつた

C　第3号墳（東大調査第70号墳）

外形　本墳は花園村小前田字塚屋六四二にあり、第1号墳の西方約一五〇米に位置する。発掘当時に於いて既に石室だけを残し、封土は全く取りはらわれていた。従つて外部施設については不明であるが、周囲にみられる同群の古墳より推して、径一五～二〇米の円墳であつたと考えられる。又以前に田尻高樹氏により形象埴輪の台部と思われるもの（第18図）が発見されており、今回の調査でも数十片の埴輪片が出土したので、埴輪を伴なつたものである事は確かである。

石室　石室は土砂が充満し、又天井石も奥の一枚はもとのままであつたが、手前の二枚は石室内に落ちこんでいた。天井石の石質は石灰岩・緑泥片岩・緑泥岩である。第1・2号墳と同様に二〇～三〇糎の河原石(砂岩)を積んで作られた横穴式



第18図　第3号墳出土埴輪実測図

石室であるが、石室に面した内側の一列が東・西両壁共石灰岩・緑泥片岩・緑泥岩等他の石室の場合と異る石を用いているのが特徴的である。羨道部は既に破壊されており、現状では長さ四・七米、巾一・五米のほぼ矩形に近い玄室だけが残されていた。入口に近い一米程は徐々につぼまり巾八〇糎となり、そこに長さ一・一五米、巾二五糎の細長い石が床より一五糎出ておかれていた。恐らく羨道部と玄室との間仕切石であろう。石室の方位は磁北より二五度東に偏していた。床には一面に径一〇～一五糎の河原石が敷かれていた。奥壁は二枚の磐石が重なり、高さ一・八米であつた。側壁は高さ約一・三米までは石を積み、その上に小砂利を五～八糎、次に粘土を七～一〇糎、更に砂質の褐色土を一・五糎積んでいる。石を積んだ部分は上部に行くにつれせり出し、東壁で約二〇度、西壁で約一五度の傾斜を持つていた。石室の周囲には数列河原石を積んでめぐらしているが、基底部に於いて巾は一・九米であつた（第16・17図）。

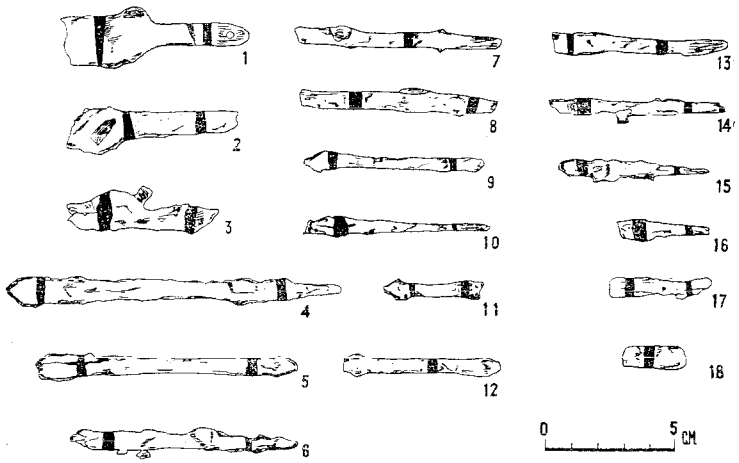
遺物　本墳も既に盗掘にあい、取残しの鉄鏃・刀子が奥壁・両側壁に近い床上に散乱していた。又若干の人骨が発見された。

鉄鏃（第19図4～18）は実根式で4は長さ一二・八糎、鏃身の巾一・二糎である。他はいづれも完全でないが同様のもと考えられる。

刀子（第19図1～3）は三例残片が発見された。

尚人骨は成年男子の大腿骨片であつた。

以上今回調査を行つた三つの円墳につき概要を記した。いづれも盗掘にあい、封土は削取られて崩壊寸前であつた。埴輪は第1・3号墳にあつたと考えられ、第1号墳にみられた葺石は特徴的であつた。石室の側壁の石



第 19 図　第 3 号墳出土刀子・鉄鏃実測図

は眼下の荒川の河原で採集出来る転礫で作られているが、天井石、及び第3号墳石室にみられるものは、上流の長瀞付近より運んだものであろう。石室の構造は末期の古墳に一般的にみられる胴張りのあるものであり、僅かに残された遺物も同様である。以上からいづれも古墳時代末期に営まれた群集墳の一部と考えられる。

四　古墳群の考察

以上に述べた調査の結果から本古墳群の性格について考えて見たい。[9] 既述のように嘗ては隣町中小前田にかけて百数十基の古墳群があつたが、現在ではその大半は無作為に破壊され、遺物の大半も散逸してしまつた。我々の調査は、僅かに盗掘墳三基の発掘と若干の遺物調査にすぎず、古墳群全般を論ずる資料としては誠に不充分である。然し、先年実施された寄居町における東京大学の調査した古墳群も、本古墳群の一部であり、その様相も我々の調査例と酷似している。今、それらの事実も併考して考察を進めてみたい。

1　外形、及び内部構造

外形はすべて円墳であり、石室は略南に向つて開口する

る横穴式石室である。石室は付近荒川河床に多く見られる砂岩礫を以て、床・壁を構築し、頂部に近づくにつれて巾をせばめ、縦断面が梯形に近い、胴張りある構架法を用いている。奥壁・天井石・羨門・羨道扉石などは、大形の片岩系の石を用いているが、これらは現在でも寄居町より上流河床に見られ、また切出されている石である。此等畳一畳に近い様な巨石をどの様に運んだかは不明であるが、恐らく舟運によつたであらうという郷土史家の説があると伝聞している。石室の壁は人頭大の礫であるが厚く構築され、殊に羨道部、墳丘南側などは更に厚く、高く礫が用いられ、葺石もかなりの層をなしている。従つて盛土の少ない小円墳、或は盛土を削られた古墳などは一見積石塚に近い感じを抱かせる。我々の管見では、岩手県江刺郡猫谷地古墳群[10]・宮城県加美郡上郷古墳群、[11] 近くでは秩父市原谷古墳群[12]などがこの形式に近い。此等は何れも礫の多い河川の近くに営まれたものである。後藤守一教授はこの様なものを積石塚の範疇に入れ帰代人系統の墳墓とされている。[13] 調査墳墓以外ではあるが、石室内に更に箱式棺をおく例が一例あつた。この例は関東地方後期古墳に往々見られる。又第1号封土で発見された骨壺は、形態みて平安朝のものと思われる。

2　出土遺物

調査墳は何れも盗掘に遭い、残存遺物も乏しく、また既出の遺物も大半散逸し、好事家の手に渡つている。我々の調査資料から見て、その大半は後期古墳特有のものであり、また副葬品の組合せ、即ち直刀・鏃・玉・須恵器・馬具といつたセットもこの事実を裏書きしている。特に注意すべきは、須恵器の中に自然釉あるものも認められ、また進んだ整形技術などから若干の年代下降も思わせる類がある。此等は寄居町末野窯址群出土須恵器に酷似し年代的にも近いと考えられる。[14]

前述の石室内箱式棺内より硬玉製勾玉二個が出土したが、此等は何れも淡緑色を呈し、奈良時代の仏像宝冠などに用いられたものに近い感じを持つている。即ち、遺物の大半は奈良朝に近い頃のものと考えられる。

3　営造者

以上遺跡・遺物より見て本古墳群は後期古墳群でも終末期に近い頃の営造であり、実年代は略々奈良朝に近い頃の所産と考えられる。古墳はいうまでもなく生産力を背景とした上部構造の所産であり、その背景としては営

ては農業生産のみが考えられていたが、近時、漁業・鉱業生産などを背景とする後期古墳群が次第に類例を増しつつある。[15] 本村は既述のように荒川扇状地上にありながら灌漑の便悪く、その大半が陸田・桑田で、近時漸く水田が開田されつつある状況で、古代に於ても農業生産力は低いことが予測され、現在も他にはこれといつた産業もない。また奈良朝前後の遺跡は古墳群を除いては見当らない。隣接町村中、当代遺跡に富むのは西接する寄居町で、荒川渓谷の谷口扇状地の末端に位置し、弥生式遺跡の存する他、古墳・窯址・廃寺址等奈良朝前後の遺跡に富み、平安時代以降は藤田郷・藤田庄の中心となり、また武蔵七党中の猪俣党の根拠地ともなつていた。前述の遺跡の内、生産関係のものとしては窯址群があり、この窯址は須恵器・瓦の両者をやき、規模に於ては荒川流域最大のものであり、また武蔵国分寺献進瓦なども出土している。従つて奈良朝前後、ここに窯業者の集団があり、その生産に従事していたと考えられる。

本古墳群のある処は、沖積地で礫の堆積が厚く、土壌の発達が不充分の点などより、弥生・古墳時代を通じて農業生産力が乏しく、その為に恐らく不毛の地に近く、墳墓地帯、所謂塚原として利用されたのではあるまいか。[16] 前述のような同時代頃の生産地帯の位置、古墳の実年代が寄居町に近い方が古く、花園村の方、即ち東漸するに従つて新しくなるような事実、及び出土品と窯址出土品との類似などの諸点を併考して、本古墳群を残した人々の中には窯業集団の人々があつたと考えたい。

然らばその集団は如何なる氏族であつたであろうか。古代東国に帰化人が遷置されたことは天智天皇五年冬十月に百済の男女を遷した記事を初見として、その後も屢々散見する。殊に武蔵に於いては、文献・地名・伝承等において、此等帰化人に関係あるものも決して少くなく、その来住は奈良朝までも継続した。この様な人々が、東国開発、及び生産技術の導入に活躍したであろうことは充分に考えられることである。[17] 現寄居町付近で窯を設け、須恵器・瓦などの生産を開始した集団の中にも、三韓出身の先進技術をもつた人々、或はその子孫がいたであろう。然し、その人々が武蔵に来住し文献に残る、秦氏であつたか、高麗氏であつたか、或は金氏であつたかについての文献的証明は全く不可能であり、また本古墳群、或は窯址などには、少くとも直接的な大陸の影響は認め難く、所謂帰化人的要素は稀薄である。これは古墳後期或は奈良朝頃来住した帰化人はいち早く日本人と同化

したか、又は他地域からの移住により固有な要素が薄れ、特有の遺跡を残さなかつた故かも知れない。[18]

従つて、将来後藤教授の説かれる如く、本古墳群の如き、河原の礫を比較的多く用いて古墳を構築する手法が、単に河川流域特有の手法でなく、三韓地方に連なる積石塚の系統であることが更に確実性を増すならば、本古墳群も又帰化人とその子孫のそれということになり、窯址との関連性も更に確実性を増すであろう。然し現在の処帰化人の墳墓とするには傍証が乏しい憾みがある。

我々の調査結果は、後藤教授の説への反対資料とはならないが、また積極的傍証資料ともなりえなかつた。恐らく、本古墳群の被葬者の中には、窯業や官牧事業に従事した文献に名を残さぬ帰化人やその子孫も存在したであろうとの推測の域を脱し得ぬのが、正直な処我々の現在の考えである。更に家畜副葬の事実の解釈は類例の増加を俟つて後考に譲りたい。

五　結　語

我々は史学科五六年度調査事業の一つとして、本村の考古学的調査を行い、以上に述べたような調査結果と、それに基いた、甚だ貧弱な資料からではあるが、一試論をのべた。考古学はいうまでもなく、文献史学と共に歴史の再構成をその目的とする。本報告は書かれた歴史の乏しい本村に於いて、遺跡・遺物を通じて見たそれぞれの時代の断面を描写したにすぎない。我々は将来に於いても、更に何等かの形でこの流域の調査を続け、古代史の再構成の資料の蒐集と考察を進めて行きたいと願つている。その意味で本報告が本地域に於ける一調査資料として、また将来の調査の手がかりに幾分なりとも研究者各位に活用される点があれば我々にとつてはそれこそ望外の幸であるといわねばならない。

稿を終るに当り、調査、及び報告作成に終始便宜を賜わつた東京大学教授駒井和愛博士、本調査の実施を承認された手塚隆義教授はじめ史学科教員各位、及び参加学生諸氏に改めて深く謝意を捧げるものである。

尚、本稿は後藤守一教授に対する昭和三〇年度文部省科学研究費、綜合研究「東日本に於ける古墳の伝播と社会の発展の研究」に対する中川の分担研究の一部を成すものであることを付言する。

註

1　中川成夫　相模大磯町愛宕山横穴調査報告（史苑一六―一）一九五五、六

埼玉県大里郡花園村の考古学的調査

2 この古墳は一九五六年一二月に砂利採集業者家屋の敷地となって消滅した。

3 埼玉県史　第二・三巻、及び新編武蔵風土記稿による。

4 曽野寿彦　吉田章一郎　有角石斧を出した埼玉県の弥生式遺跡（歴史と文化Ⅱ）一九五七、四

5 寄居町末野に須恵器窯址群、また馬騎内には奈良時代廃寺址、及び窯址がある。

6・7 埼玉県史　第二・三巻

8 稲村坦元　武蔵野の青石塔婆一九五五、三

9 中川は、昭和三一年一一月、第一回立教大学史学会大会で考察の一端をのべた。

10 滝口宏・他　岩手県江釣子村猫谷地古墳群調査報告（岩手史学9）一九五一、九
古墳群は北上川河岸段丘にある群集墳で、蕨手刀が出土し、実年代奈良朝に近い頃と考えられる。

11 伊東信雄　宮城県加美郡上郷古墳（日本考古学年報4）一九五一

12 一九五五年、明治大学調査、嘗て本古墳群より蕨手刀が出土し、奈良朝頃に実年代が比定されている。

13 後藤守一教授の日本人類学会例会講演による。

14 吉田章一郎　埼玉県大里郡寄居町末野の窯址調査（考古学雑誌四〇―一）一九五四、七

15 高兵衛島調査団　謎の師楽式　一九五六、一
豊元国　古墳村落の研究（日本考古学協会彙報別篇6）一九五六、五

16 近藤義郎　蕨山原　一九五四、佐良山古墳群　一九五二等に古墳群の立地について塚原の問題に触れている。

17 埼玉県史　第二巻第五章氏族第二節蕃別の武蔵移入の項

18 関　晃　帰化人　一九五六、五

（追記）　今回の調査で発見された動物遺体は次の如くである。

ウマ（*Equus przewalskii* Pol.）上顎左乳臼歯（dm 3 or 4）第1号墳石室内充満土中より発見された。

ウマ（*Equus przewalskii* Pol.）大腿骨一、生後一～二年のもので第2号墳石室内充満土中より発見された。関節炎にかかった痕跡がある。

イノシシ（或いはブタ）（*Sus* aff. *leucomystax leucomystax* Tem. or *Sus scrofa domesticus*）趾骨、蹠骨十数片、生後六～八ケ月位で第3号墳石室内充満土中より発見された。

この外、第1号墳石室末面直上より、鳥骨らしきものが発見された。

以上いづれも化石化の程度より、古墳時代後期のものとみて差支えない。出土地点が石室内である事と生後間もない点が共通しており、意識的に葬ったとも考えられるが他の発見例がまだない。